

門奈直樹先生の定年退職にあたって

門奈直樹先生は2008年3月に定年を迎えられ、30年間勤務された立教大学社会学部を離れられました。先生は1978年4月に桃山学院短期大学から立教大学社会学部に助教授として着任され、社会学科に所属されました。その後、1984年に教授となりました。2002年からは21世紀社会デザイン研究科教授を兼任され、さらに2006年からは社会学部に新設されたメディア社会学科に移籍され、本学において教育と研究で多大な貢献をされました。

先生の功績は教育、研究面にとどまらず、社会学部の運営においても特筆すべきものがありました。先生は1990年4月から1991年3月まで社会学研究科社会学専攻前期課程主任を、また1992年4月から1996年3月までは社会学部社会学科長を、そして1997年4月から2001年3月までは社会学部長を歴任され、社会学部の充実と発展に多大な貢献をされました。門奈学部長の時代、社会学部は学部運営の体制を一新し、実務型へと大きく脱皮することができました。また、在任中の困難な出来事にも先生は先頭に立って解決に向けて尽力されました。先生は1997年から3度にわたって学校法人立教学院の評議員を、さらに1998年4月から2001年3月まで学部長互選理事として立教学院理事会においても重責を果たされました。

門奈直樹先生のご専門はジャーナリズムの思想史と比較マスコミ論であり、過去から現在、未来にわたるマス・コミュニケーション環境の総合分析を、とくにイギリスを中心としたヨーロッパと日本との比較を通じた研究として展開され、日本におけるマス・コミュニケーション研究の第一人者として多数の著書ならびに論文を著されています。先生は単著に限っても『現代の戦争報道』（岩波新書、2004年）まで7冊発表されています。中でも『沖縄言論統制史』（1970年）と『民衆ジャーナリズムの歴史－自由民権から占領下沖縄まで－』（1983年、後に、講談社学術文庫、2001年）は不朽の研究であり、ジャーナリズムを志す人々の必読書と言えます。学界における先生への高い評価は、国内外の学術研究集会の基調講演者・座長を数多くつとめられていることから窺い知ることができます。とくに日本マス・コミュニケーション学会においては、1995年から97年まで理事をつとめられ、またジャーナリズム研究部会やワークショップなどで指導的役割を果たされました。

このほかにも、2001年には北京外国語大学大学院日本学研究センター教授をつとめられるなど、中国をはじめとするアジア諸国と日本の学術交流にも力を尽くされ、研究活動に従事されながら後進の指導にも積極的に関わってこられました。

権力におもねることを何よりも厳しく戒め、ジャーナリズムの真髄である批判的精神を实践された先生の学問への姿勢は、専門領域を超えて社会学部の教員全体にとって範とすべきものであることを改めて痛感している次第です。そうした厳しさだけでなく「門ちゃん」の愛称で呼ばれた先生は上下の隔てなく人と接する人情味豊かな方でもありました。

定年退職というひとつの区切りはありますが、門奈先生は2008年4月より京都産業大学経営学部教授として勤務されています。京都は先生が若き日々を過ごされた地であり、そこで新たな活躍の場を得られたことをうれしく思います。

ご健康に留意され、ますますのご活躍を祈ってやみません。

2009年3月

社会学部長

木 下 康 仁